JA改革 激論投稿

Room Z
http://www.zenkyou.com/roomz/

●ＪＡ改革について　【元農協職員】

・ＪＡ改革答申の底流

現代は「今だけ、金だけ、自分だけ」の世の中になりつつあるといわれている。地球規模で急速に広がるグローバリゼーションの中で新自由主義経済もまた拡大し、富裕層と貧困層の間で格差の拡大、富の集約が進んでいる。世界に誇る素晴らしい伝統・文化・習慣と緑豊かな国土を持つわが国においてもグローバル化・経済成長の名の下、「かけがえのないもの」がどんどん失われている。時流に合わせた「改革」はもちろん必要なことではあるが、ＴＰＰ交渉にみられるような米国政府＝企業論理（利益の極大追求）という構図は、とても国民の立場での改革には見えない。一連の「ＪＡ改革」にも、その底流に企業利益のみを考える人たちの姿が見え隠れする。目的はわが国の食糧か、保険か、医療か、知財か。

・ＪＡ改革の声は昔から

多くの組合員は農協に感謝し、運動への参画や事業の利用をしていることはいうまでもない。が、ＪＡ改革については、30年以上前からさまざまな意見があることを記憶している。いわく、『農協がどんどん遠くなる、営農関連事業・生活関連事業は儲からないから縮小しよう、大規模農家には農協は役立たない、全農には集荷・販売機能がない、農協の購買品は高い、共済の一斉推進期間なので居留守にしよう、職員教育ができていない、農協職員はサラリーマンか、信用・共済・販売・購買事業の意味がほとんど理解されていない、現場の苦労・実態を連合会は理解していない、意見の出ない総代会が良い』等々である。これらの問題点は日々改善に向け努力されてきているので、今はそれほどではないかもしれないが、私は「経営層の努力不足」「組織全体での戦略不足」を感じている。

・協同組合理念と農協の現状

協同組合には、素晴らしい理念（協同組合原則・ＪＡ綱領）がある。しかし現状は、競争の激化や世代交代により、理念の「お題目」化、実態との乖離、全国連・協同会社での理念学習の希薄化、「理念で飯が食えるか」と公言する経営層などが拡大しているように見える。一方、組合員も巻き込み繰り返し「理念」教育を行っている農協も多い。そのような農協は、組合員との「信頼関係」が強く、すべての事業を組合員中心で組み立て、「地域に欠かせない拠点」になっている。協同組合の基本は「学習を大切にする」「本音で議論をする」など、当たり前のことだが現実はどうだろう。

・私たちは何をすべきか　～ＪＡ改革答申をバネにして

レイドローは、現代を「狂気の時代」ととらえ、「協同組合こそが正気の島になり得る」といった。「なる」ではなく、あくまでも「なり得る」である。協同組合理念は、国家を超えて活動する多国籍企業の対極にある。農協改革の答申に万一「協同組合の存在の否定」があるならば、私たちは協同組合人として、国民として、「大変大きな責任」を背負っていることになる。今後、各種の改革会議・審議会等での検討が進められるが、単に組織防衛的な議論でなく、協同組合の原点に返った議論、この国のあり方・将来を考える議論、組合員の本音を聞く議論、一流の経営管理を行う組織にするための議論を求めたい。

今回の答申は大きな改革であり、痛みを伴うが、可能性と危機との間にある協同組合が、「正気の島」になり得る道を作ることを忘れずに、自信を持って検討・改革してほしいと念願している。そして、組織内はもとより、国民的な議論を求めたい。多くの日本人はそれに共感してくれるはずである。内向きにも、外向きにも、今回の試練を大きなバネにしたいものである。

本コーナーでは、「JA改革」についての投稿を募集しています。

送付先
全国共同出版株式会社 編集部ルームZ係　FAX:050(3730)0059
〒160-0011 東京都新宿区若葉1-10-32　電子メール：keijitsu@zenkyou.com